

不登校の現状 (文部科学省, 2021)

2020年度

○不登校を理由に30日以上欠席した中学生は**13万人超え**
全在籍者に占める割合は、小学校や高等学校の**2～5倍**

○一旦不登校になると、60.3%が90日以上欠席
→ **困難が長期化する**恐れ

現在登校している児童生徒への予防的支援が必要

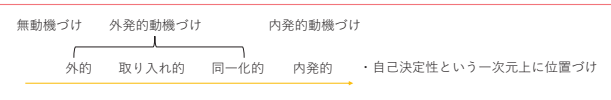
中学生における登校への動機づけと学校適応感との関連について

佐々木 梨奈 (香川大学) 谷渕 真也 (香川大学)

学校へ向かう力の測定 ～ 自己決定理論

これまで … 研究ごとに独自の尺度が使われ、理論の一貫性が課題

五十嵐・茅野 (2018)
学業達成分野の「自己決定理論」(Ryan & Deci, 2000)に着目



小中学生を対象とした登校動機づけ尺度を作成

RAIの問題点

自律的な動機づけと統制的な動機づけの両方が高い者 = RAIが0点
両方が低い者 = RAIが0点



4つの動機づけの組み合わせに注目した動機づけのプロフィールから検討
→ 個人差に着目した動機づけの理解と介入への示唆が可能
→ 個別性の高い予防的介入の検討に有効

自律的な動機づけスタイルは学校適応感と正の関連

	平均値	SD	外的理由	取入れ的理由	同一化的理由	内発的理由
居心地の良さの感覚	3.53	0.91	-.19**	.07	.64**	.70**
劣等感の無さ	3.22	0.72	-.34**	-.25**	.19**	.25**
被信頼・受容感	2.79	0.77	-.14*	.10	.46**	.53**
課題・目的の存在	3.69	0.90	-.19**	.18**	.71**	.71**

**: $p < .01$, *: $p < .05$

- ・外的理由は、学校適応感と負の関連
- ⇒ 概ね自己決定理論や、西村・櫻井 (2013) を支持

自律的動機づけ群と統制的動機づけ群の特徴

	Low M-Group	Medium M-Group	Controlled M-Group	Autonomous M-Group	High M-Group	F値	多重比較	η^2
居心地の良さの感覚	2.90 (0.87)	3.32 (0.72)	2.21 (1.06)	4.14 (0.60)	4.20 (0.50)	46.07***	CG < LG < MG < AG, HG	.40
劣等感の無さ	3.33 (0.66)	2.99 (0.64)	2.89 (1.04)	3.59 (0.61)	3.24 (0.70)	10.64***	MG, CG < AG	.13
被信頼・受容感	2.30 (0.74)	2.68 (0.59)	1.99 (1.06)	3.20 (0.69)	3.21 (0.61)	20.54***	LG, CG < MG < AG, HG	.23

Note. LG = Low M-Group, MG = Medium M-Group, CG = Controlled M-Group, AG = Autonomous M-Group, HG = High M-Group

***: $p < .001$

- ・ **自律的動機づけ群**：
⇒ 登校動機づけにおいて最も適応的な動機づけプロフィール
- ・ **統制的動機づけ群**：
⇒ 登校動機づけにおいて最も適応的でない動機づけプロフィール

・登校動機づけのRAI (五十嵐・茅野, 2019)
・学習動機のプロフィール (西村・櫻井, 2013)
の結果を支持

劣等感の無さの特異性

	Low M-Group	Medium M-Group	Controlled M-Group	Autonomous M-Group	High M-Group	F値	多重比較	η^2
居心地の良さの感覚	2.90 (0.87)	3.32 (0.72)	2.21 (1.06)	4.14 (0.60)	4.20 (0.50)	46.07***	CG < LG < MG < AG, HG	.40
劣等感の無さ	3.33 (0.66)	2.99 (0.64)	2.89 (1.04)	3.59 (0.61)	3.24 (0.70)	10.64***	MG, CG < AG	.13
被信頼・受容感	2.30 (0.74)	2.68 (0.59)	1.99 (1.06)	3.20 (0.69)	3.21 (0.61)	20.54***	LG, CG < MG < AG, HG	.23

Note. LG = Low M-Group, MG = Medium M-Group, CG = Controlled M-Group, AG = Autonomous M-Group, HG = High M-Group

***: $p < .001$

- ・中動機づけ群が低く、低動機づけ群と高動機づけ群が中程度
- ・中動機づけ群が**統制的動機づけ群と同程度に低い**

- ・「**自律的な動機づけが高いほど劣等感が低い**」とは言えない
- ・**統制的な動機づけの影響や無動機づけのバランスに着目すべき** (西村・櫻井, 2013)

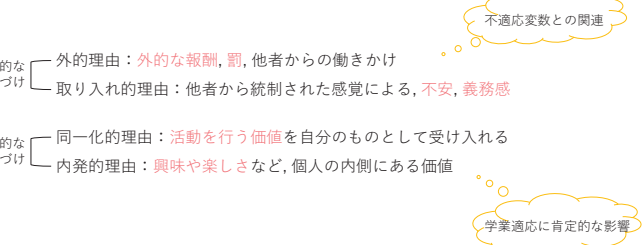
不登校の現状 (文部科学省, 2021)

2020年度

○不登校を理由に30日以上欠席した中学生は**13万人超え**
全在籍者に占める割合は、小学校や高等学校の**2～5倍**

○一旦不登校になると、60.3%が90日以上欠席
→ **困難が長期化する**恐れ

現在登校している児童生徒への予防的支援が必要



本研究の目的

- 自己決定性の観点から、中学生の登校動機づけの特徴を明らかにする
- 登校動機づけのプロフィールごとの学校適応感を明らかにする

取り入れ的理由は適応変数に正負両方向の関連

	平均値	SD	外的理由	取入れ的理由	同一化的理由	内発的理由
居心地の良さの感覚	3.53	0.91	-.19**	.07	.64**	.70**
劣等感の無さ	3.22	0.72	-.34**	-.25**	.19**	.25**
被信頼・受容感	2.79	0.77	-.14*	.10	.46**	.53**
課題・目的の存在	3.69	0.90	-.19**	.18**	.71**	.71**

**: $p < .01$, *: $p < .05$

取り入れ的理由 = 義務感, 不安と関連した動機づけ
義務感が双方向の影響
⇒ 五十嵐 (2015) の知見を支持

・自己決定理論の「自律的な動機づけは適応的、統制的な動機づけは不適応的」という二分論的解釈が必ずしも適合しない可能性

RAIで弁別できない3つのプロフィールの違い

	Low M-Group	Medium M-Group	Controlled M-Group	Autonomous M-Group	High M-Group	F値	多重比較	η^2
居心地の良さの感覚	2.90 (0.87)	3.32 (0.72)	2.21 (1.06)	4.14 (0.60)	4.20 (0.50)	46.07***	CG < LG < MG < AG, HG	.40
劣等感の無さ	3.33 (0.66)	2.99 (0.64)	2.89 (1.04)	3.59 (0.61)	3.24 (0.70)	10.64***	MG, CG < AG	.13
被信頼・受容感	2.30 (0.74)	2.68 (0.59)	1.99 (1.06)	3.20 (0.69)	3.21 (0.61)	20.54***	LG, CG < MG < AG, HG	.23

Note. LG = Low M-Group, MG = Medium M-Group, CG = Controlled M-Group, AG = Autonomous M-Group, HG = High M-Group

***: $p < .001$

- 居心地の良さの感覚：
 - ・低動機づけ群、中動機づけ群、高動機づけ群の順に高い
 - ・低動機づけ群は**統制的動機づけ群**よりは高い
 - ・高動機づけ群は**自律的動機づけ群と同程度に高い**

課題・目的の存在では2年生が特徴的

学年とクラスタの交互作用あり ($F(8, 279) = 2.44, p = .015, \eta^2 = .07$)

	Low M-Group	Medium M-Group	Controlled M-Group	Autonomous M-Group	High M-Group	F値	多重比較
1年生	3.45 (0.89)	3.53 (0.49)	1.77 (0.52)	4.47 (0.50)	4.41 (0.55)	26.93***	CG < LG, MG < AG, HG
2年生	2.50 (0.60)	3.35 (0.75)	2.75 (0.67)	4.18 (0.68)	4.49 (0.39)	24.27***	LG < MG < AG, HG
3年生	3.08 (0.94)	3.49 (0.64)	2.87 (1.40)	4.36 (0.54)	4.34 (0.34)	15.88***	LG < AG, HG

Note. LG = Low M-Group, MG = Medium M-Group, CG = Controlled M-Group, AG = Autonomous M-Group, HG = High M-Group

***: $p < .001$

1年生と3年生: 統制的動機づけ群の低さが特徴
⇒ 他の学校適応感の指標と同様

2年生: 低動機づけ群の低さが特徴
⇒ 低動機づけ群の生徒に、取り入れ的理由 (= 義務感) を高める介入が一定の効果

中学2年生は中だるみの時期で、
動機づけの維持が課題とされる

学校へ向かう力の視点

本間 (2000)
登校理由: 自己基準, 親圧力, 習慣, 学校魅力
学校魅力が欠席願望を抑制する大きな要因

五十嵐 (2015)
登校義務感が高いほど、学校享受感が高くストレス反応が低いが、不登校傾向と登校義務感の両方が高いと、登校への葛藤強い

⇒ 学校へ向かう力の質の違いに着目することが重要

学校へ向かう力 ～ 登校への動機づけ

五十嵐・茅野 (2019)
登校動機づけの自律性の高低によって、学校生活と不登校傾向との関連性が異なる

茅野・五十嵐 (2020)
・登校への動機づけが、実際の登校状況 (出欠席日数等) に関与する可能性

いずれも、
RAI (relative autonomy index) (Grolnick & Ryan, 1989) を使用して検討
・動機づけの自律性の程度を算出するための4つの動機づけスタイルの合成変数
・(-2 × 外的理由) + (-1 × 取り入れ的理由) + (1 × 同一化的理由) + (2 × 内発的理由)

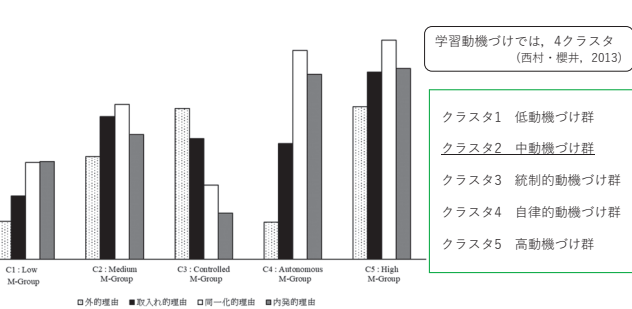
方法

調査協力者 中学生282名 (1年生99名, 2年生93名, 3年生90名)に質問紙調査を実施

調査内容
登校への動機づけ尺度 (五十嵐・茅野, 2018): 4下位尺度, 計27項目
・外的理由 ($\alpha = .76$)
・取り入れ的理由 ($\alpha = .69$)
・同一化的理由 ($\alpha = .82$)
・内発的理由 ($\alpha = .85$)

学校への適応感尺度 (大久保, 2005): 4下位尺度, 計30項目
個人の認知や感情に焦点化して測定する
・居心地の良さの感覚 ($\alpha = .95$): 周囲に溶け込め、なじめていることによる気楽さ等の感覚
・課題・目的の存在 ($\alpha = .90$): 課題や目的があることによる充実感
・被信頼・受容感 ($\alpha = .89$): 周囲から信頼され、受容されている感覚
・劣等感の無さ ($\alpha = .75$): 周囲との関係による劣等感 (逆転)

登校動機づけの5つのプロフィール (ウォード法によるクラスタ分析)



	Low M-Group	Medium M-Group	Controlled M-Group	Autonomous M-Group	High M-Group	F値	多重比較	η^2
居心地の良さの感覚	2.90 (0.87)	3.32 (0.72)	2.21 (1.06)	4.14 (0.60)	4.20 (0.50)	46.07***	CG < LG < MG < AG, HG	.40
劣等感の無さ	3.33 (0.66)	2.99 (0.64)	2.89 (1.04)	3.59 (0.61)	3.24 (0.70)	10.64***	MG, CG < AG	.13
被信頼・受容感	2.30 (0.74)	2.68 (0.59)	1.99 (1.06)	3.20 (0.69)	3.21 (0.61)	20.54***	LG, CG < MG < AG, HG	.23

Note. LG = Low M-Group, MG = Medium M-Group, CG = Controlled M-Group, AG = Autonomous M-Group, HG = High M-Group

***: $p < .001$

- 被信頼・受容感：
 - ・低 < 中 < 高の順序は居心地の良さの感覚と同様
 - ・低動機づけ群は**統制的動機づけ群と同程度に低い**
 - ・高動機づけ群は**自律的動機づけ群と同程度に高い**

不登校を予防するための介入への示唆

- 友人関係や学習、行事で楽しさを感じられる学校・学級づくり
⇒ **長期的には内発的理由を高める**
- 学校で勉強することの大切さや意味を伝え、「自分のためになる」という生徒の思いを支持する
⇒ **長期的には同一化的理由を高める**
- 叱る、「なぜ休んだのか」と理由を尋ねる, 「登校しなさい」と指示する
⇒ **外的理由を高めて登校行動を促進するが学校適応感を低める**
- 「学校に行くのは当たり前」「勉強が遅れるかもしれない」といった義務感や不安を高める
⇒ **2年生の低動機づけ群の生徒には一定の効果**
適応が低い生徒を対象に中動機づけ群を目指して上の2つと組み合わせる
自律的動機づけを上回らないように慎重に介入する
劣等感の高い生徒には禁忌